

宮地嘉六著作集

第五卷

宮地嘉六著作集

第五卷

宮地嘉六著作集 第五卷

一九八四年八月二十五日発行

定価 三千円

著者 宮地嘉六 ©宮地彌生子

編集者 宮地嘉六著作集編集委員会

発行者 宮嶋 秀

印刷所 株式会社 開明堂

製本所 株式会社 松本製本所

発行所 慶友社
東京都千代田区駿河台三の七 荻野ビル
電話(二九三)八九八三

凡 例

一、本著作集の収録文は、原則として著者の単行本を底本とし、初出及びその後の刊本と校合した。著者書き入れ本のある場合はそれを参照した。単行本未収録の著作は初出によったが、収録されている著作でも特に初出によった場合がある。それらの異同などは「後記」に注記した。

一、収録文は、底本に忠実であることを原則とし、仮名遣い・送り仮名・著者固有の表現などはそのままとした。ただし、漢字は新字体に改め、明らかな誤字・脱字・句読点の欠落などは適宜加除訂正をした。

一、振り仮名は、総ルビの文も含めて難読・特殊な読みなどの最少限にとどめた。

目次

夜半の歌	3
愛情山河	30
子を育てる	53
職工物語	95
老残	221
八ツ手の蔭	254
王子権現抄	284
後記	315
森本修	

宮地嘉六著作集 第五卷

監修 小田切秀雄

編集 堀切利高

森本修

黒古一夫

宮地彌生子

大和田茂

印刻 宮地嘉六

夜半の歌

或る朝、佐平は意外な人に途中で出あつた。あまり風采のあがらぬ、づんぐりした洋服姿の会社員風の男が、二歳位の女の子を抱いて、ドタ靴を外輪に踏みながらひよこ／＼やつて来る。見たやうな男だと思ひ、近づいてからよく見ると、それは十五年ほど前に駒込動坂町の或る二階家で唐紙一重を境にお互に独身で間がりをしてゐた田崎——といふ男だつた。

「や、田崎君、おめづらしいですなあ……」

「おう、野田さん……しばらく……」

二十代の昔の田崎青年は脱帽すると額がひどく禿げあがつてゐた。

「あなたのお子さん？……」

と佐平は瘦せた子を見ていつた。

「え、実はねえ……」

互に挨拶が前後した。去年細君に死なれてからは女の子を毎朝託児所に預けて勤めに通うてゐる次第を田崎は手短に語るのだつた。

「それはたいへんですねえ」

田崎は出勤時刻を気にしてゐる風でもあり、佐平も長々と立話をしてゐるわけにもゆかないので、そのうちにまたあふ機会を得ようといつて別れたが、佐平は相手の現状を聞いてちよつと心を打たれた。

「よん／＼／＼……よん／＼／＼……」

と抱いた子をあやしなからゆく田崎の後姿を、佐平はそれとなく見送つて、更に心を打たれた。彼は、田崎を少しでも慰めるために自分の現在の境遇をも語ればよかつたと思つた。同じやうな苦難の道を辿つてゐる昔の知人と、そのまま別れたことがあつてなく感じられて是非もう一度あひたいものだと思つたが、唯この先のオリエンタル会社のそばだと聞いただけで、番地を聞きもらしてしまつた——それつきりで幾日かは過ぎた。

佐平は毎朝、まだ明けきらぬ戸外へ飛び出して広い分譲地の新鮮な朝靄のなかを泳ぐやうな手ぶりをして胸いっぱい呼吸をしながら散歩するのが習慣である。昼間は大した情景でもないが早曉だけは薄靄によそひして魅力と清新さがあふれ、見知らぬ避暑地の朝のやうな感じさへする。

この爽快なの／＼する朝の散歩もせい／＼一時間しか許されぬ彼である。七時には二人の子供を学校へ送り出すために自炊にとりかかり、そしていつもの気の毒な男所帯の主人公に立ち戻るのである。

蚊帳の裡には片親育ちの二人の子が仔豚のような寝像でまだぐう／＼眠つてゐるのである——散歩の帰りにはこの前に出あつたあたりで田崎にあへはしないかと、いつも心がけるのだつた。

四月には女の子が初等科に入学して以来、佐平は朝の食事をすませると毎朝のやうに学校の柵のところまで出かけて行く。運動場の大勢の生徒の中に自分の子の姿を見出すのが一つの楽しみなのだ。

授業が始まる前の校庭は紅白斑々な金魚の養殖場を見るやうだった。小粒の児童達が元気に、目まぐるしくピン／＼はねてふざけてゐる。柵の外に佇つて微笑で眺めてゐるのは大概附近に住む生徒の親達で、親達はそこで互に顔馴染になり、朝の挨拶を交はすのである。佐平はそこでよく、俳人佐藤氏の夫人と出あふ。もう一人の魅力のある細君ともよく出あふ。然しどうかした時は、彼女の後姿を見ると、彼は、はにかみやらしく、ずつと遠くの方に位置を選んで佇つたのだつた。

「おたくさまのお嬢ちゃんは何月お生れでゐらつしやいます」

「三月生れですがあの通りちびです」

「でもお気性のはつきりしたお嬢ちゃんですこと、きつとおできになるんでせう」

「いえもう、家でおさらひをしてやるといいんですが、どうも……」

彼女の長男も今年の四月に入学したのであつた。彼女は佐平がやもめであること、男手で兄妹二人の子供の世話をしてゐることを知つてゐた。

佐平はいつも運動場の中をのびあがるやうにして見渡す。自分の子がなぜだか、すぐには見つからぬので、彼はをかしいほどやきもきする。なあんだ……あの子はどこにゐるんだらう……と本気で心配する。

綱飛び、鬼ごっこ、毬遊び、手つなぎお猿、皆、どの子も似たやうな顔のおかつばざろひ、その中に自分の子をはつきり見つけ出すことはなか／＼骨が折れた。家ではかなり背丈ものびて見え、正月

には腰あげもありつたけ下してやつたくらるだのに、広い校庭の大勢の子の中で見ると、ひどくちびに見える——そればかりではない。佐平は自分の子についてはいろ／＼のことが気にかかるのだ。あの子はどうして大勢の子供と一緒に遊ばないのだらう……いつ見てもひとりぼっちで人の遊びを眺めてゐるのはどうしたのだ……やつぱり母親がなくて片親育ちのせるなのか……父親の孤独癖の遺伝か知ら……などと心にかかる彼であつた。

家で見ると慾目ではあるが、さうひけをとらないつもりの氣に入りの女の子だが、大勢の子の中ではあまり光つてはゐないと思ひ、頭髮が赤ちやけて見えるのが氣にもなり、上衣がだぶ／＼でスカートが長すぎてスマートでないのを今更に感じ、やつぱり女の子は母親の注意が必要だと、つく／＼思つたりするのである。そのくせ男の子の方はやりつばなしでゐられる彼であつた。

始業のベルが鳴ると児童は校庭の半ばを色どつて整列し、訓導の一人が台に登つて「氣をつけ」と一声してから二言三言いつて降壇すると、勿体ぶつた校長が現はれて登壇し、生徒一同の敬礼にやをら答礼してから東北訛りでその日の訓諭をする。ラジオ体操に移ると整列した児童は風にそよぐ花畑のやうに一斉に左右上下の動作を続ける——と佐平はそろ／＼家の方へ引返へす——。

女の子は学校から戻ると父親にいろ／＼のおしやべりをして笑はせるのだ。

「お父さん、石渡先生たらとても面白いのよ。毎日ごはんは誰がたくんですの。お父さんです。とわたしといったのよ。いいお父さんですわねえ、あなたのお父さん、わたしに頂戴よ……だつて……ほんとに面白いことをおつしやる先生……」

父親は微笑する——また或る日彼女はかういふのだ。

「ねえお父さん。今日、お修身の時間に冷水摩擦のお話しを先生はなすつたわよ。先生は寒い冬でも毎朝冷水摩擦をなさるんですつて。おえらいわねえ。だから先生はとてもお丈夫よ。御病氣なんかまだ一度もなさらないんですつて……」

父親は微笑で聞く。小肥りな女教師が毎朝半裸体になつて冷水摩擦をやるさまを戯画的に幻想しながら。

子供は学校へ行つて、先生の前では家庭をそのまま反映して見せる一つの媒介者でもある。或る夜女の子は宿題の綴り方に苦心し、書き終ると声高に父親に朗読して聞かせるのだつた。

「わたくしは、ときどき、うちのお父さんの、しらがをぬいてあげます。今日はおにいと二人でぬきつこをいたしました。ごほうびにお父さんから一せんいただきました。そしてちよきんしました……」

父親は微笑しながらよくできたとはめてやる。然し本音をいふと父親は自分の子の受持先生に好感をもつてゐたので、あまり白毛の多いことなどを書かれないのである。だが、どうせ求婚する勇氣も自信もない。まさかに自分の子の受持教師につけ文も送れまい。それほど破廉恥な父であるといふことは女の子に対して恥づかしいわけ——何だつて俺は学校の女教師などに惚れなきやならぬのだ、と自分に腹を立てて見る。然し近來、彼はしば／＼人にかう語る。

「僕は後妻を持つなら学校の女教師にしようかと思ふ。子供に理解があるからその点からも大いに……」

「それはよからう。候補者があるのかね。わが子の教師に惚れるといふことは母親にも父親にもある

ことだよ」

と医者佐藤氏はいふ。

「なに、空想だがね」

子供の受持女教師は決して醜婦ではない。飛びきりの美人でもない。母性型の血色のよい婦人であつた。

が、兵士は教練をしてゐる時、いちばん立派に見えると同じやうに、女教師といふものも教壇に立つて児童を教へ導いてゐる時がいちばん見えがするものである。或る日の午後、佐平はその女教師と途中でゆきあつたが、小肥りのからだにそぐはぬ洋装、斜めにさした日傘、その歩きぶり、すべてが田舎臭くて唯の職業婦人以上には見えなかつた。

「子供がお世話に預つてをります……」

「どういたしました……」

二人は遅れて来る電車を省線駅のプラットフォームで一緒に待ち合はせることになつた。

「お母さまがゐらつしやらないと承つてをりますが、なか／＼でございますでせう」

「いえ、もうすつかり馴れまして、それほどにも感じなくなりました。然しこの五年間、子供に直接かかはりまして、そのため、先生方のお骨の折れることがお察しできるやうでございます。初等科の先生方の御苦労も大へんでございませう」

「いえ、わたくしどもはそれほどには感じませんのでございますの。やはり子供がすきなんでしょうから」

「学校ではあの子はどんなぐあひでございませうか。片親育ちで、いけない点がいろ／＼あることと存じますが……」

「そのわりにさうではございませんですわ。何でもお父さんがして下さる、つてお父さんのことをよくおつしやいます。綴り方にもお父さんとの交渉ばかりなんですもの、おつほつほつ……」

そんな会話のうちに電車が来た。佐平は二駅ほど同車した。

「お父さん。あのねえ、石渡先生は御病気で、しばらく学校をお休みになるんですつてよ」

女の子はまた或る日のこと学校から戻つて来るといきなり父親にさう告げた。ついさき頃途中であつた時は、健康ではちきれさうに見えた女の先生、それが病氣だと聞いてもすぐには信じられなかつたが、病氣ならばお見舞をしなければならぬと思ひ、佐平は学校の小使部屋を訪ねて様子を聞くことにした。

小使は佐平の問ひに対し、箒を持ったまま微笑でかう答へた。

「あ、石渡先生ですか、おめでたがいよ／＼おきまりになつて信州の方のお国へ明日お帰りになります。御結婚ですから、少くも二週間ぐらゐは学校をお休みになるでせう」

「さうですか。御結婚でお休みになるのですか、子供は、御病気でお休みのやうにいひましたもんですから……」

「あ、はつはつはつ……」と小使は高笑ひをした。

佐平は彼自身のうちに喜劇を感じながらも打ち消しがたい或るさびしさを覺えた。

それから十日あまりもたつてから子供はまたしても学校から戻つて来て父親にかう報告した。

「お父さん、石渡先生はもうすっかり御病気がなほつて今日から学校へいらしたわよ。きれいなお袖のついた着物をめして、お袴をはいてとてもお立派よ。わたし、洋装のときの先生よりもすきよ。それにお顔がまつ白になつて、見ちがへるやうよ」

「さうかい」

と父親は唯返事した。

彼はこれまでのやうに学校の柵の方へは散歩に行かなくなつた。何故かその方へ足が向かないのだ。僅々二週間あまりのうちに美しく變つたその女教師の姿を見たくもあつたけれど、教へを受ける一児童の父として、許されまじき彼女に對する放漫な聯想が彼を悩ましてゐた。

然し更に更に彼を寂寥と哀愁に突き落す日がそれから間もなくやつて来た——その女教員がどこかの他の学校へ転任するといふのであつた。

「つまらないなあ。石渡先生、行つておしまひになつた……」

と女の子は学校から戻つて来て父の前でしよげて見せた。

父親はその晩、晩酌の度をすごし、べろ／＼に酔つて詩吟をうなつたりした。

「どうも国民学校の初等科教師の転校といふことは児童に及ぼす影響の上からはよくないと僕は思ひますが、校長などその点に多少留意してゐるのですかねえ……」

と佐平は、或る夜、町内のよりあひの席で、区の学務委員と隣りあつてすわつたので、そんな話をもちかけた。児童よりもその父なる佐平自身のさびしい心もちを慇懃^{うづた}へてゐるのであることを当人も気づいてゐたであらう。

「あれはいかんですね。折角なづいて、教師を親同様に思うてをる児童から、もぎ離すのはかあいさうですよ。ところがねえ、往々、教員自身の事情で転校を申出るのが多いんです。たとへば女教員が結婚すれば、その良人の勤務さきの便宜によぎなくされて、適当の地域の学校へ移して貰ふやうに頼むので、校長もそれを諒としないわけにはゆかんですなあ」

「まあ、さういふわけでせうねえ。然し……」

「おたくのお子さんは一年生でしたね、さうく、あの石渡といふ女教師が他校へ移りましたが、あれは校長も惜しがつてゐました。なか／＼良い女教師だったらしいです。校長がほめるくらゐだから……もつともね、逃げたさかなは皆大きいもので……」

毎月、六日、十六日、二十六日、と六の日の夜は小学校の北側の自性院の境内で盆踊りに類した音頭踊りが催される。佐平も或る夜二人の子をつれて踊場へ行つたが、はからず田崎の姿をそこで見出した。

「や、田崎君、こないだは失礼」

「おう……」

彼はこの前に出逢つた時のやうに洋服姿で子供を抱いて本堂の石段のところに腰をかけてゐた。よい機嫌らしく赤い顔をしてゐた。会社からの帰りに託児所から子供を受取つて日頃ゆきつけの食堂で晚餐をすまし、子供のきげんとりに踊りでも見ようといふのであらう。

「実はね、お訪ねしたいと思つてたが番地を聞きもらしたもんだから……」

「いや、訪ねて下すつてもいいけど、今、親ちの家に同居さして貰つてゐますから、却つて窮屈な思ひをさせて失礼だから御遠慮したいんです。近いうちに越すことにはなつてゐますが、今月いっぱいはどうしてもゐるなきやありません」

両親のところへ同居して父子がひどく冷遇されてゐる状態を田崎はありのまま語つた。

「僕と親ちときたら、とても仲が悪いんです。小学校時代から親ちの傍にゐるのがいやで親類に置いて貰つてゐたくらゐで、駒込動坂町にあなたと隣りあつて間借りしてゐたのもそんなわけからでした。どういふ宿世の因縁ですか、全くおはづかしいです」

佐平もさういはれると、以前にもそんな話を聞かされたやうな氣もした。今はよぎなく父子二人が厄介になつてゐるが、子であり孫であるのに他人よりもあさましい扱ひを受けてゐることを憤慨の口調で田崎は語つた。

「どういふわけですか……」

「他人に話しても本當にして貰へないです。この子などは本来なら目に入れても痛くない孫ですが、まるつきり、やさしい言葉一つかけてくれる両親ぢやないんです。子供ながらそれが分ると見えて祖母父母のところではこの子は小さくなつて泣き声だつてたてません。だから、途中のこんなところに立ちよつて踊りでも見せてやるんです」

両親の家に、今は医者 of 未亡人である姉とその娘、それに田崎のすぐ弟など一緒に同居し、田崎父子に対してだけ皆が冷淡で肉親らしい温情を寄せないといふ。そのわけを佐平は深く知らうともしなかつたが、駒込動坂町に一緒にゐた時分の田崎を思ひ浮べても、律義な青年であつたし、夜の裏町で